他人は占えても

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
他人は占えても

【Ｎコード】
Ｎ９６３４Ｃ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
占い師秋山由佳里。バーで気になる人がいてそれで悩んでいると。占い師の恋愛話です。占い師も人間ですから恋をします。

第一章

他人は占えても

秋山由佳里は困っていた。困っている理由は自分でもわかっていた。

「どうすればいいのかしら」

自分の仕事場所で商売道具をあれこれおいじりながら溜息をついている。彼女の商売道具はカードである。ついでに言うならば商売は占い師である。

占い師はよく恋愛を占う。彼女はよく当たる、アドバイスが上手いということで評判の占い師である。その彼女が困っていたのだ。

「言うべきか言うまいか。それなのよね」

黒い髪もいじりだした。彼女はロングのストレートでまあ普通の背丈とスタイルによく合っている。顔立ちは穏やかで目元が特に優しい。肌は白く幼く見える顔立ちでもある。服はわざとアラビア風の独特の雰囲気にしている。コレも仕事用である。

「何でこんな気持ちになったのかしら」

また呟く。

「自分でわからないっていうか。本当に」

誰もいない仕事場で客が来るまであれこれと考える。それは仕事が終わってからも同じだった。

仕事が終わるとよく飲みに行く。アラビア風の仕事着を脱げば白いシャツに青いスラックスといった素っ気無い服装に変わる。実は服装にはあまり興味がない。

この日はバーで飲んでいた。カウンターでカクテルを一人で楽しんでいる。

「お悩みですか」

その彼女に黒いベストと赤い蝶ネクタイのマスターが声をかけてきた。

「最近静かですが」
「悩んでないとこんなふうにはならないわよね」
由佳里は薄い苦笑いを浮かべてそう言葉を返した。
「ええ。悩んでいるわ」
「理由は？」
マスターは今度はそう尋ねてきた。
「宜しければお話下さい」
「仕事でよく聞く話のことだけれどね」
そう述べてきた。
「よくある話。それもあちらこちらに」
「お金のことですか？」
「いいえ」
その質問には首を横に振った。それと共に手にグラスを持つ。小粋な洒落たグラスである。そこに紅いカクテルが入っていた。ブラッディ＝マリーである。
「それなら困っていないわ」
「左様ですか」
「少なくともここで飲む程度にはね」
軽くジョークを飛ばした。実際に彼女は金には困ってはいない。そこそこ売れている占い師だからだ。だから今もここで飲んでいるのだ。
「あるから。安心して」
「それに関してはですね」
「そういうこと」
また笑って言葉を返した。笑みはまだ苦笑いのままである。
「また別のことよ」
「では人間関係のトラブルで」
「まあそんなところね」
そう述べる。
「ちょっと。気になるのよ」

「気になることですか」
マスターはその言葉でおおよそのことがわかった。その表現ですぐに思い当たることは一つである。彼もそうなるだけの人生経験は積んできている。
「御相手は」
「ここによくいる人よ」
由佳里はそう答えた。
「カウンターにね。今日はいないけれど」
「カウンターにですか」
「ほら、いるじゃない」
ちらりと右の方を見て述べる。
「サラリーマンっていうか銀行員風の。あの人よ」
「ああ、あの方ですか」
マスターはそこまで聞いて納得したように大きく頷いた。それから述べた。
「あの方がお好きなのですか」
「ええ。名前は」
「袴田様ですね」
「名前知ってるの」
「勿論です」
にこやかに笑って答えてきた。その物腰は洒落てダンディであると共に穏やかであった。その動きが実にバーに合っていた。
「あの方もこの店の常連ですしね」
「そうね。だから気になってきているのよ」
由佳里はまた寂しげな笑みを浮かべて述べた。
「顔も声も」
「いい感じですよね」
マスターはそう述べた。その袴田という客はすらりとした長身で細面の眼鏡が似合う知的な顔に黒い髪をオールバックにしている。端整な男だった。

「あの方は。実際に」
「いい人なの？」
「人としてもよくできた方ですよ」
マスターは笑って言葉を続ける。
「真面目で。しかも穏やかで」
「人に嫌われる性格じゃないってことね」
占い師の顔になっていた。その顔で話を聞いていた。

第二章

「要するに」
「その通りです。あの方でしたか」
「意外だったかしら」
顔から笑みを消してマスターに問う。目線が上向きになる。それが大きめで澄んだ目をよく映えさせていた。何か誘うような目になっている。
「私がああした人を気にするなんて」
「いえ」
マスターはそれは否定した。
「こういうのはわかりませんから。何しろ恋は」
「盲目ね」
その言葉を口にする。
「よく言われる言葉よね、本当に」
「占い師をされていたらよく聞く御言葉では？」
マスターは今度はこう尋ねてきた。
「違いますか？」
「いえ、その通りよ」
由佳里の返事は何か予定調和めいたものだった。
「実際に。歳が親子程離れたカップルとか。不倫もあるし」
「そういうことですね」
「これだけは本当に自分ではどうしようもないものなのよ」
「そしてそのどうしようもないことを導くのが」
「占い師なのよ。私みたいな人間」
そう述べてうっすらと笑う。彼女も極端な悪人ではない。多少歪なところもあると言われているが取り立てて意地悪でも陰険な人間でもない。まあ普通である。
「けれどね」

「けれど？」
由佳里の溜息に気付く。
「若しかして御自身も」
「そういうこと。わかったのね」
「ええ、まあ」
マスターは少し笑って由佳里に答えた。その手にあるグラスを丁寧に拭きながら。
「勘ですけれど」
「こういうことは気付かれ易いのよね」
由佳里の笑みが変わった。苦笑いに。
「案外ね。心って外に出るから」
「そういうものですか」
「少なくとも私はそう思うわ」
多少微妙な言葉を出す。どうにも自分自身ですら言葉が出しにくくなっているようである。
「職業柄でしょうね。見えるのよ」
「オーラとかですか」
「ううん、そう言ってもいいわね」
マスターの言葉に応える。
「お客さんがどういった事情で来るのかわかるのよ。おおよそのことは」
「はあ」
「そうしてどんな占いの結果を望んでいるかもね。けれど結果はまちまちだし」
そういうものである。占いは決して自分の願った結果ばかり出るものではない。また解釈一つでどうにでもなるものだったりするのだ。占い師というものはある意味人生相談的な存在でもある。由佳里もそれは今までのことでよくわかっているのだ。
「それに」
「それに？」

「自分は占えないのよ」
また溜息をつく。どうしていいかわからないといった感じで。
「それだけはね」
「占っておられる方もいるようですが」
マスターはふとしたような感じで由佳里に問うてきた。
「貴女は違うのですか」
「それは私の流儀じゃないの」
それが彼女の返答であった。
「流儀でないと」
「もっと言うとね。占おうとするとどういうわけかインスピレーションが止まって」
「はあ」
「これだけは占えなくなるのよ。自分でもどうしてかはわからないけれど」
「では自分ではわからないと」
「ええ」
マスターの言葉にこくりと頷く。その後でカクテルを飲み干す。
また同じものを頼む。
「もう一杯ね」
「どうぞ」
すぐに次のブラッディ＝マリーが出された。由佳里はそれを手に取ってまた飲む。
「だから。自分でもどうしようかと思ってるのよ」
「あの方が好きなのですね」
「そうよ」
それははっきりと認めた。気持ちは偽らなかった。
「それはね。はっきりとしているわ」
「では。どうされるのですか？」
マスターはまた由佳里に尋ねてきた。
「告白されますか？」

「したいけれど」
言葉が呟きになった。視線が下に落ちてしまう。
「できないわね。何故か」
「わかりますよ、それは」
マスターはその言葉を聞いて由佳里に述べてきた。
「どうしても。臆病になりますよね」
「ええ」
マスターのその言葉にもこくりと頷く。その通りだからだ。
「仕事の時はよく言うけれどね。怖れてはならないって」
「勇気を出して告白しろと」
「ええ。占いの結果にもよるけれど」
由佳里はどちらかというと客に対して明るく積極的なアドバイスをする方である。迷っている相手にはきっぱりと教えるべきであると考えているからだ。しかし今は違っていた。
「大体はそうね」
「ではそうされてはどうでしょう」
マスターはそう提案してきた。
「御本人に。如何でしょうか」
「怖いわね」
笑みが力ないものになる。溜息と共にある笑みであった。
「そういうのって。自分自身では」
「怖いですか」
「今気付いたけれど。臆病なのよ」
自分を評してこう述べた。
「こういうことには。本当にどうしようかしら」
「迷っておられるのですか」
「そういうことよ。言おうか言うまいか」
そのことも素直に述べる。
「わからないの。自分では」
「では。こうされてはどうでしょうか」

マスターは困っている由佳里に対して述べてきた。
「こうするって？」
「とりあえず明日もここに来られて下さい」
こう提案してきた。
「明日に。如何でしょうか」
「この店になのね」
「はい」
顔を上げて問う由佳里に対して述べる。
「そうです。来られるだけなら問題はないと思いますが」
「そうね」
その言葉には何も思うことなく頷くことができた。確かにそれ位はと思った。
「じゃあ。また明日ね」
「ええ」
マスターは由佳里のその言葉を聞いてにこりと微笑んでみせた。それからまた述べた。
「では。宜しく御願いしますね」
「わかったわ」
またマスターの言葉に頷く。
「じゃあまた明日。御願いするわ」
「はい。ではまた明日」
こうして由佳里は次の日もこのバーに来ることになった。次の日いつもと同じく仕事を終えた彼女はバーに来た。そうしてまたカウンターに座るのであった。
「来たわ」
昨日と同じような服だった。ただし今日は赤い丈の長いスカートをはいている。
「これでいいのよね」
「はい。よく来て下さいました」
マスターは穏やかな笑みで彼女を出迎えた。そうして述べる。

「どうぞ。お座り下さい」
「ええ」
マスターに勧められるまま席に座る。そこはいつもの指定席だった。

第三章

「それで。来たけれど」
由佳里は席に座るとマスターに問うた。顔は彼に向けている。
「今日は。詳しい相談かしら」
「私ではないのです。これが」
マスターは穏やかな笑みのまま彼にまた述べる。
「マスターじゃなくて？」
「そうです、私ではなく」
にこりと笑っての言葉であった。
「別の方ですが。宜しいでしょうか」
「ええ、いいけれど」
職業柄こういうことには慣れている。だから何も迷うことなくその申し出を受け入れた。思えばこれが決まりとなったのであった。
「誰かしら」
「こちらの方です」
言うと店の奥からすっと誰かが出て来た。その人は。
「えっ」
「宜しいでしょうか」
マスターはその人を手で指し示しながらまた由佳里に問うた。
「こちらの方を占われて」
「え、ええ」
由佳里は戸惑う声で答えた。
「御願いします。それでは」
「はい」
彼はすっと由佳里の前に座った。そうして彼女をじっと見て話すのであった。
「それでですね」
由佳里が最初に口を開いた。

「宜しいでしょうか」
「私が占って欲しいことを言うのですね」
彼はそう彼女に言う。
「確か。そういう流れだったかと」
「そうです」
また彼に答える。
「まずは御名前を」
「山崎篤弘」
彼はそう名乗った。
「銀行で働いています」
「銀行員なのですね？」
話を聞きながらカードを出す。彼女はカード占いなのだ。トランプやタロットを使う。今出してきたのはトランプであった。
「そうです。働いている場所は」
「いえ、そこまではいいです」
顔を赤らめさせて答えた。彼、山崎篤弘の顔をとてもではないが見られない。
「そこまでは」
「そうですか。それでですね」
「はい」
話を続ける。何故か二人共顔を赤らめさせ俯いている。
「占って欲しいことは」
「それは」
「好きな人がいまして」
「えっ！？」
その言葉を聞いた由佳里の顔が硬直する。
「好きな人、ですか」
「そうです。その人は」
心臓が止まりそうになる。これからの言葉を聞くのが怖かった。
だが篤弘はどういうわけか話すその間にもじっと由佳里の顔を見詰

めている。まるで思い詰めたかのように。
「御名前はですね」
「ええ、御名前は」
「秋山さんっていいます」
「秋山さん！？」
自分の名前だ。それを聞いてまずは苗字が同じだけだと思った。
「秋山さんですか」
「はい。それで下の名前はですね」
「はい。何ていうんですか？」
「由佳里さんっていいます」
「それって・・・・・・」
その名前を聞いた由佳里の顔が止まった。まるで鏡が割れるかの様に。今にも壊れんばかりの顔になってしまった。
「はい、その方がどうしても気になりまして」
「そうなのですか」
「よかったら。占ってくれませんか」
「いえ」
由佳里は篤弘のその言葉に首を横に振る。それから言うのだった。
「その必要はありません」
「といいますと」
「何故なら。その方もまた貴方を」
「私を」
篤弘はじっと彼女の顔を見て述べる。
「気になっているからです」
「そうだったのですか」
篤弘はそれを聞いて息を飲む。その中で全てを理解した。
「では私達は」
「お互いに。宜しいでしょうか」
じっと彼を見て言う。
「二人で」

「はい、二人で」
「こういうことなのです」
マスターは隣同士の席でじっと見詰め合いながら話をする二人を見ながら言った。
「自分は占えなくても。何もわからなくても実るものがあるんですよ」
それが恋ということであった。

他人は占えても　　完

２００７・９・３

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9634c/

他人は占えても

2010年10月8日15時57分発行